

なるほど！うみはく

潜水艇「白鯨号」

市立海の博物館

☎ 32 6006



昨年度の秋期に、海の博物館には県内外から修学旅行の団体にお越しいただきまし

た。来館した子どもたちに人気ナンバーワンの展示といえ

下部に向けて配置されています。

当時の記録には、照明装置は500W4個（耐圧式特殊電球）、用途は、海峡、海底の調査、深海観察ならびに深海資源調査、深海における引き揚げ作業、深海における水中撮影など、呼吸装置は空気浄化酸素補給式、通信装置は有線式電話、推進装置は上下に前後各1個、常用潜水深度は200m、耐圧試験深度は500mと記載されています。

「白鯨号」は、鳥羽市にあった東海サルベージ（株）が同じく海の博物館に展示されている潜水球「東海号」の作業性能を高めるべく、独自の工夫を加えるとともにフランスの当時の新鋭潜水艇バチスカーフも参考に、昭和33年8月に完成させた潜水艇です。形式は鯨型、最大直径は1.2m、全高2.1m、全長6.15m、全容積4.8m³、全重量4300kg。観測窓は全部で14個（直径200mmが1個、同150mmが9個、同100mmが2個、同30mmが2個）あり、うち5個の観測窓が海底部を観測するため

「白鯨号」は、明石海峡大橋の架橋海底調査や青函トンネルの海底地質調査などに活躍しました。青函トンネルのルートを決めるため海底地質調査などの担当者だった持田豊さんの著書『青函トンネルから英仏海峡トンネルへ』には「・町のサルベージのおやじさん（藤原豊吉）の特別な気持ちからできたものを使わせてもらった。思えば鋼板1枚にガラス、そして海水が

ポタポタ垂れる円筒の無動力潜水艇（白鯨号）がなにより有り難かった。なんといつても、推測を事実として確認できた」との回想が記録されています。

持田さんたちが「白鯨号」で調べた明石海峡大橋や青函トンネルの海底地質調査などの経験や結果は、その後、英仏海峡トンネルなどの海底トンネルを掘る仕事にも活用され続けてきました。

博物館にお越しの際は、ぜひ中に入ってみて深海探査の気分を味わってみてはいかがでしょうか。



左は潜水球「東海号」、右は潜水艇「白鯨号」

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.18

～磯焼けの話～

水産研究所 ☎ 25 3316



生えていない。

坂手島東端の海岸「毛牟茂の浜」は私が継続して観察しているポイントである。これらの写真からこの場所が「変わったしまった。大変だ」という感想を持っているわけではない。環境が少し泥っぽくなり、潮位変動に変化があったのかな、と判断するわけではなく、SNS投稿用に撮影した何気ない写真であるが、その写真からでもこういう環境変化が推測できる。

4月から「第3回鳥羽海藻文化祭」が動画配信というかたちで開催されている。テーマは「海の森に忍び寄り不穏な影『磯焼け』と観察のすずめ」である。磯焼けかどつか、沿岸生物の分布が変化しているかどつかは海女さんや漁師さんのように同じ場所を同じ時期に見るなどしていないとわかりにくいものだ。しかし、今はスマホがある。いつでも綺麗な写真が撮れる時代だ。それを差し障りなければ研究所に送っていただきたい。これらの蓄積からこの掛け替えのない鳥羽の海を考える知恵が生まれるかもしれない。



2017年3月。ヒジキがよく茂っている



2021年4月の毛牟茂の浜。フクロノリという茶色の風船のような海藻が目立つ



2017年3月。ハバノリが生える同じ場所。周りの海藻が少し違う



2021年4月の毛牟茂の浜、ハバノリが生える場所



第3回鳥羽海藻文化祭動画再生リスト